

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1992年度

榛原町文化財調査概要 9

1993

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1992年度

榛原町文化財調査概要 9

1993

榛原町教育委員会

序

大和の東方、宇陀地方には、多くの文化財が存在しています。なかでも埋蔵文化財は、毎年、各所で発掘調査等が行われ、貴重な成果をあげています。当委員会では平成4年度に6件の発掘調査と1件の測量調査、3件の立会調査を実施し、新しい知見を得ることができました。

本書は、これらのうち沢遺跡、高塚遺跡、殿垣内遺跡、南山古墳の各調査概要をまとめたものです。本書が僅かながらも今後の調査・研究の一助となれば幸いです。

これらの調査を実施するにあたっては、奈良県教育委員会をはじめ関係機関ならびに関係各位のご協力を賜り謹んで厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

棟原町教育委員会

教育長 山 尾 正 弘

例　　言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡橿原町内に所在する「橿原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（橿原町文化財調査概要9）である。
- 2 調査は、平成4年度（1992年度）国庫補助事業・県費補助事業として橿原町教育委員会が実施し、平成4年11月1日に着手し、平成4年3月31日に終了した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと橿原町教育委員会技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。
- 5 各遺跡の調査記録、遺物等は橿原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I	埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II	位置と環境	3
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
III	沢遺跡第4次発掘調査概要	9
1	調査の契機と経過	
(1)	調査史抄	
(2)	調査の契機と経過	
(3)	現地調査日誌抄	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
(1)	調査区と基本層序	
(2)	遺構	
(3)	出土遺物	
4	まとめ	
5	抄録	
IV	高塚遺跡第3次発掘調査概要	25
1	調査の契機と経過	
(1)	調査史抄	
(2)	調査の契機と経過	
(3)	現地調査日誌抄	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
(1)	調査区と基本層序	
(2)	遺構	
(3)	出土遺物	
(4)	廢塚の測量調査	
(5)	犬塚の測量調査	
4	まとめ	
5	抄録	
V	殿垣内遺跡発掘調査概要	37
1	調査の契機と経過	
(1)	調査の契機と経過	
(2)	現地調査日誌抄	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
4	まとめ	
5	抄録	
VI	南山古墳測量調査概要	41
1	調査の契機と経過	
(1)	調査史抄	
(2)	調査の契機と経過	
(3)	現地調査日誌抄	
2	位置と環境	
3	填丘測量調査	
4	横穴式石室の現状	
5	まとめ	
6	抄録	

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

棟原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は年々増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。1992年度（平成4年度）までに棟原町教育委員会が扱った発掘届・通知、発掘調査等は表1のとおりである。

1992年度（平成4年度）の発掘調査等（表2）のうち、本書には国庫・県費補助事業として実施した沢遺跡、高塚遺跡・鷹塚、殿垣内遺跡の発掘調査概要及び南山古墳の測量調査概要を収録している。

表1 発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要 \ 年度	1984 昭和59	1985 昭和60	1986 昭和61	1987 昭和62	1988 昭和63	1989 平成元	1990 平成2	1991 平成3	1992 平成4
発掘調査届（法57-2）	0	0	0	3	2	0	4	4	11
発掘調査通知（法57-3）	3	3	3	6	13	6	9	4	7
発掘調査届等合計	3	3	3	9	15	6	13	8	18
遺跡踏査願	4	5	5	1	4	3	4	2	2
発掘調査（町教育委員会担当）	2	4	4	4	4	3	7	7	6
立会調査（町教育委員会担当）	0	0	0	2	3	1	0	0	3
測量調査（町教育委員会担当）	0	0	0	0	0	0	0	1	1
調査件数合計	2	4	4	6	7	4	7	8	10



写真1 芳野川流域と棟原の市街地

表2 1992年度発掘調査等一覧表

番号	調査別	調査地名	調査名	調査地	現地調査期間	調査原因	調査面積 (m ²)	遺構	差異	要物	備考
1	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (第3次調査)	綾原町佐原元佐原 350ha分	1992・4・20~ 1992・6・12	宅地造成工事 (三相相互間)	450.3	サヌカイト、馬頭器、火生土器、馬頭土器、土頭器、馬頭土器、瓦器、瓦、アイゴ羽口、瓦質和田螺形、埴輪、瓦質、瓦平底甕、瓦質大甕、铁劍、木製品(木盤、下駄、曲物ほか)、自然通物(鏡子、馬骨)ほか	自然谷地形 (自然流路)		
2	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (第4次調査)	綾原町佐原元佐原 479ha	1992・8・12~ 1992・8・29	地区公民主導工事 (綾原町)	70.9	溝1	須恵器、土師器		
3	発掘調査	1-98	山路橋引遺跡	綾原町山路 135-1・136	1992・10・22~ 1992・10・23	上水道配水管建設工事 (綾原町)	31	土坑1	なし		
4	発掘調査	2-544 15-D-84	沢遺跡 (第4次調査)	綾原町沢 1411-1	1992・11・17~ 1992・11・30	農業用合掌造工事 (綾原町)	16	ピット2、土 坑1、溝4、 竪溝1	須恵器、土師器、瓦器、陶器、 石器ほか	本報告	
5	発掘調査	2-355 2-356	高塚遺跡、疊塚 (第3次調査)	綾原町高塚 121	1992・11・30~ 1992・12・15	農業用合掌造工事 (綾原町)	6	溝1	須恵器、土師器、瓦器	本報告	
6	発掘調査	15-B-129 15-B-130	殿庭内遺跡	綾原町上井足 1199-7	1993・3・11~ 1993・3・12	個人住宅建設工事 (綾原町)	10	(自然谷地形)	瓦器	本報告	
7	測量調査	1-18	南山古墳	綾原町佐原玉小西 1868-1	1992・12・24~ 1993・2・18	範囲確認調査 (綾原町)	(1500)	古墳 (韓保石室)		本報告	
8	立会調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡	綾原町佐原元佐原 200-1・201	1992・6・17	駐車場 (綾原町)	なし	なし		本報告	
9	立会調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡	綾原町佐原元佐原 585-586	1992・8・18	質料置場 (綾原町)	なし	なし		本報告	
10	立会調査	3-1・2 163-9-10	成場遺跡	綾原町成場 818-2	1993・3・1	構造改善センター整設 (綾原町)	なし	なし	なし	本報告	

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良県の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間に縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称され、大字宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大字宇陀町、南は菟田野町となつており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図1 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では3点の有舌尖頭器が出土しており、うち、2点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である方形台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この墳の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳數は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によってその状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで渡来系氏族でもある文殊麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

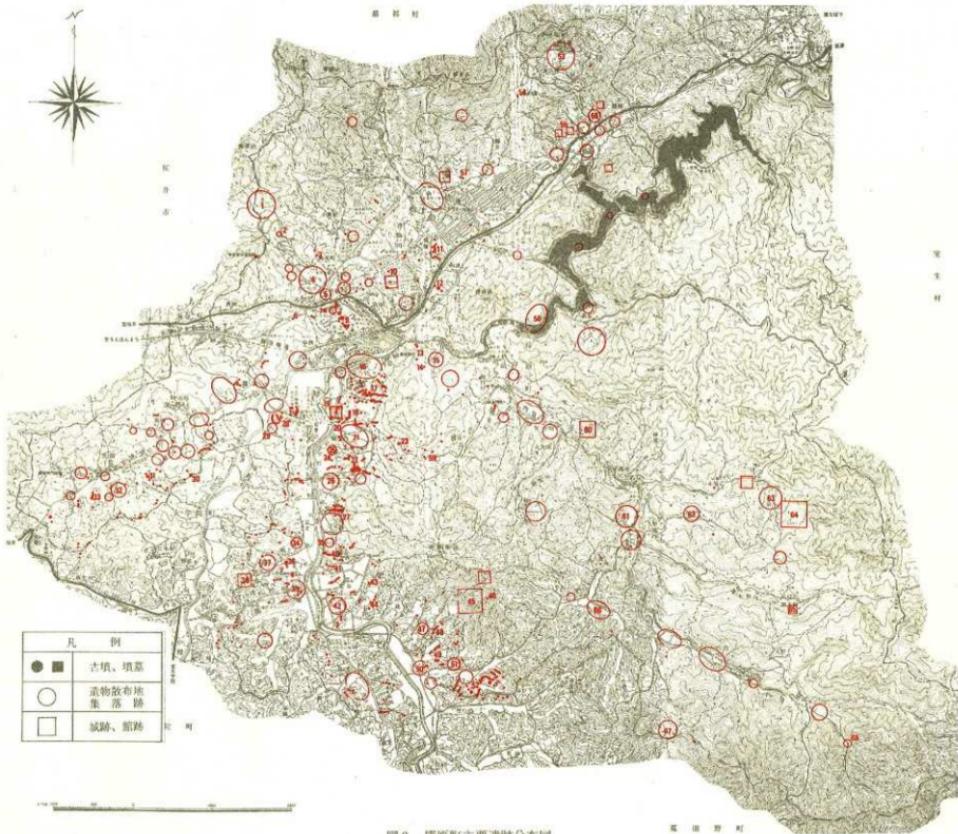
古代末には宇陀においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

(参考文献等省略)

表3 横原町主要遺跡分布図(図2)対照表

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
1	鳥見山中腹遺跡	横原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生	
2	岩尾火葬墓	横原町萩原	火葬墓	奈良	
3	南山古墳	横原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	本報告
4	清水谷遺跡	横原町萩原	遺物散布地	弥生～古墳、中世	
5	天ノ森遺跡	横原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生、中世	
6	西峰古墳	横原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	
7	キトラ遺跡	横原町萩原	方形台状墓、中世墓	古墳前・中世	
8	谷畑中世墓地	横原町福地	中世墓地	室町	
9	谷畑古墳・神木坂古墳群	横原町萩原	円墳(木棺)、方墳(横穴式石室、磚積石室)	古墳前・後	
10	奥芝古墳群 城跡道路	横原町福地	円墳(木棺、磚積石室)、住居跡、城跡	古墳前・後、中世	
11	長峰古墳群	横原町長峰	円墳群	古墳	
12	北谷古墳群	横原町福地	前方後円墳・円墳(横穴式石室)	古墳後	
13	不動堂古墳群	横原町植牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
14	石風呂古墳	横原町植牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
15	石風呂遺跡	横原町植牧	遺物散布地	縄文	
16	丹切遺跡	横原町萩原・下井足	遺物散布地	縄文～中世	
17	舟切古墳群	横原町萩原・下井足	円墳(木棺直葬、横穴式石室)ほか	古墳後	
18	下井足古墳群	横原町下井足	方形台状墓、円墳ほか	古墳前～後	
19	井足城跡	横原町下井足	城跡	中世	
20	愛宕山古墳	横原町上井足	円墳(石室)	古墳後	
21	谷遺跡	横原町上井足	集落跡	弥生～古墳	
22	能峰遺跡群	横原町上井足	方形台状墓、円墳、小型横穴式石室、集落跡、城跡、中世墓地ほか	縄文～江戸	
23	上井足ワラ田古墳	横原町上井足	円墳、横穴系横口式石室2、稻形木棺	古墳後	
24	前山1号墳	横原町上井足	円墳(削竹形木棺)	古墳中	
25	殿堀内遺跡	横原町上井足	遺物散布地	中世	本報告
26	上井足北出遺跡	横原町上井足	集落跡	縄文～中世	
27	高田垣内遺跡群	横原町上井足	集落跡、前方後円墳・円墳、方墳、墳墓ほか	縄文草、弥生～江戸	
28	大王山遺跡群 篠塙向山古墳群	横原町下井足・篠塙	住居跡、方形台状墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡ほか	弥生～江戸	
29	篠塙アサマ遺跡	横原町篠塙	遺物散布地、中世墓	弥生～古墳、中世	
30	ダケ古墳	横原町西師	前方後円墳(堅穴式石室)	古墳後	
31	澤ノ坊2号墳	横原町笠間	前方後円墳	古墳前	
32	石榴垣内遺跡群	横原町笠間	集落跡、古墳	古墳～鎌倉	
33	行者山古墳群	横原町笠間	前方後円墳・円墳	古墳	
34	池上遺跡	横原町池上	遺物散布地	弥生後	

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
35	仮称 池上東遺跡	樺原町池上	遺物散布地	弥生中～後	
36	高山古墳群	樺原町池上	方墳(斜竹形木棺)	古墳中	
37	灌頂寺跡	樺原町福西	寺跡、墓地	中世	
38	福西城跡	樺原町福西	城跡	中世	
39	高塚遺跡	樺原町高塚	遺物散布地(集落跡)	弥生～古墳、中世	本報告
40	栗谷尾尻古墳群	樺原町栗谷	円墳(木棺直葬)	古墳後	
41	栗谷トノヤシキ遺跡群	樺原町栗谷	円墳(木棺直葬)、城跡、中世墓	古墳後、中世	
42	三角遺跡	樺原町栗谷	遺物散布地(集落跡)	縄文～弥生、中世	
43	石田1号墳	樺原町石田	円墳?(横穴式石室)	古墳後	
44	鳥羽1号墳	樺原町石田	円墳(小型横穴式石室)	古墳後	
45	沢城跡	樺原町大貝・沢	城跡	中世	
46	文殊麻呂墓	樺原町八瀬	墳墓	奈良	
47	大貝ヒジキ山遺跡	樺原町大貝	遺物散布地(集落跡)	縄文晩～古墳後、中世	
48	大貝古墳群	樺原町大貝	円墳(横穴式石室)	古墳後	
49	沢古墳群	樺原町沢	円墳(斜竹形木棺)	古墳中～後	
50	沢遺跡	樺原町沢	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	本報告
51	下城・馬場遺跡	樺原町沢	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
52	野山遺跡群	樺原町沢 戸石・辰巳前遺跡	方形台状墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡、遺物散布地(集落跡)ほか	古墳前～江戸	
53	成場遺跡	樺原町成場	遺物散布地、寺跡?	縄文、平安～室町	
54	伝山部赤人墓	樺原町山辺三	墳墓?(鎌倉時代の五輪塔)	鎌倉	
55	山辺城跡群	樺原町山辺三	城跡	中世	
56	熊煙神社前遺跡	樺原町山辺三	遺物散布地	縄文、中世	
57	仮称赤瀬古墳群	樺原町赤瀬	円墳(横穴式石室)	古墳後	
58	槍牧遺跡	樺原町槍牧	遺物散布地	縄文早、弥生、古墳、鎌倉	
59	西谷古墳群	樺原町槍牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
60	槍牧城跡	樺原町槍牧	城跡	中世	
61	高井遺跡	樺原町高井	集落跡	縄文早～後、奈良～中世	
62	赤坂下忍明遺跡	樺原町赤坂	住居跡	縄文、中世	
63	赤坂上佐遺跡	樺原町赤坂	遺物散布地(集落跡)	縄文、平安～中世	
64	赤坂城跡	樺原町赤坂	城跡	中世	
65	諸木野城跡	樺原町諸木野	城跡	中世	
66	八瀬長坂遺跡	樺原町八瀬	遺物散布地	縄文、古墳、中世	
67	内牧カラト遺跡	樺原町内牧	遺物散布地、祭祀遺跡?	縄文、奈良	
68	仮称滝谷遺跡	樺原町内牧	(有舌尖頭器採集)	縄文草	



III 沢遺跡第4次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査史抄

沢遺跡は奈良県宇陀郡橿原町大字沢に広がっており、現状は大半が畠地、一部が宅地や道路となっている。この遺跡は1955年（昭和30年）の町道拡幅工事に伴って地下約0.5～0.7mから包含層が検出され、ここから多くの遺物が出土したことによってその存在が知られるようになった。その後、1963年（昭和38年）には遺跡北端の畠地から水田へと下る畦畔で縄文時代後期前葉の深鉢が出土し、網干善教・小泉俊夫氏らによって長さ7m、幅2mのトレンチを東西、南北のL字状に設定した小規模な発掘調査が行われている（第1次調査）。基本層序は第1層が耕作土（約30cm）、第2層が褐色粘土層（約50～70cm）、第3層が弥生土器や石包丁を含む砂利層（20～30cm）、縄文土器を含む黒色粘土層（20～30cm）、第4層が無遺物の黄灰色砂利層となっている。この調査の遺物出土状況等から遺跡の中心は調査地よりも東南にあると考えられている。³¹⁾

1987年（昭和62年）には、農林水産省の農地開拓事業に伴って沢遺跡の東方と西方の2箇所にトレンチを設定（第2次調査）しているが、弥生時代後期～中世の土器片が少量出土したのみで、明確な遺構は検出されていない。³²⁾

橿原町教育委員会では、1991年（平成3年）2月には個人住宅建設工事に伴う、発掘調査（第3次調査）を実施し、若干の中近世の遺構・遺物を検出している。³³⁾

また、沢遺跡西側の低地において1987年（昭和62年）に橿原町教育委員会が試掘調査、1991年（平成3年）に奈良県立橿原考古学研究所が立会調査を実施しているが、いずれも砂利層（芳野川の氾濫原）を確認しているにすぎない。

(2) 調査の契機と経過

第3次調査地の東方約30mの畠地において、個人の農業用倉庫が建設されることとなったため、所有者に発掘調査が必要な旨を連絡し、埋蔵文化財発掘調査の提出を求めた。その後、1992年7月に同届が提出され、関係機関等が遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行い、橿原町教育委員会が平成4年度国庫・県費補助事業として発掘調査（第4次発掘調査）を実施することになった。

現地調査は1992年11月17日から1992年11月27日にかけて実施（実働7日）し、以後、1993年3月31日まで整理作業等を行った。

調査関係者は、次のとおりである。

調査主体 橿原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 橿原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）

調査担当者 植原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員 井上好美、森塚和彦、山本美恵子、中平穎子、村井田悟
調査作業員 横山晴江、柳沢雅子
調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課
調査協力 横山善彦、北野隆亮、山川均

(3) 現地調査日誌抄

1992年（平成4年）

11月17日（火）	11月25日（水）
地形測量。写真撮影。	遺構検出作業。遺構尖削作業。
11月18日（水）	11月26日（木）
トレンチ設定。掘り下げ開始。	トレンチ南半掘り下げ作業。遺構検出作業。写真撮影。土層断面図作成。遺構尖削。平板測量。
11月19日（木）	埋め戻し作業。
掘り下げ作業。遺構検出作業。	11月27日（金）
11月24日（火）	埋め戻し作業。地形測量。
遺構掘り下げ作業。	



写真2 作業風景

2 位置と環境

沢遺跡は芳野川東岸の標高331.5~335.5mの段丘状の畠地に位置し、現在の芳野川からは約150~300m東方にあたる。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっており、地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約1~2m高くなっている畠地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部がひかえ、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる（図3・4、図版1）。

沢集落を流れる谷川を挟んで南約200mの尾根上には、弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末~後期初頭の古墳、中世の建物遺構（寺院跡？）などが確認されている沢南遺跡、谷川を約400m東方に遡れば縄文時代晩期~弥生時代前期・中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡^{出22)}、さらに遡れば古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡^{出23)}や古墳時代前期~後期の野山古墳群^{出24)}など遺跡が集中している地域もある（図3）。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

今回の調査地は、遺跡の中心よりやや東寄りの山裾部分の畠地である。農業用倉庫建設予定地内に僅かではあるが、南北約8m、東西約2mのトレンチを設定した（図5）。

耕作土（第1層）及び暗茶灰色土（第2層）を取り除くと、重複した状況で溝、土坑、ピット等の遺構が検出できた。遺構面は、後述のとおり少なくとも3時期が考えられる（図6）。

(2) 遺構

僅かな調査範囲ではあったものの、3時期にわたる遺構を検出している（図6、表4、図版2~5）。

溝 1 (SD-01)

暗灰色土を基本とする第1遺構面に穿たれた溝である。東半部分を検出したのみで、全容は明らかでないが、その規模は延長3.8m以上、深さ5~8cmである。茶灰色土の埋土中からは、瓦器・土師器が出土している。

溝 2 (SD-02)

溝1によって西側が切られているT字状の溝である。東西の延長1.5m以上、南北の延長2.3m、深さ2~8cmである。橙灰色砂の埋土中からは、須恵器、瓦器、土師器、陶磁器が出土している。西流の溝である。

落ち込み状遺構

土坑1 (SK-01) の南半を掘削して形成された深さ55cmの落ち込みである。茶色土の埋土中か

らは、瓦器、土師器が出土している。

土坑 1 (SK-01)

推定径0.8~1mの平面形態が円形を呈する土坑である。西半は調査範囲外、南半は「落ち込み」によって消失している。茶灰色粘質土の埋土中からは、須恵器、瓦器、土師器、陶磁器が出土している。

溝状遺構 1 (SX-01)

延長2m以上、幅1.6m、深さ0.5mの溝状の遺構であるが、壁面が火による焼成を受けている。埋土は3層に大別でき、上層が淡茶色土・茶灰色土、中層が淡灰色粘土・淡茶色粘質土・黄茶色砂質土・暗茶灰色土・褐色土、下層が暗茶灰色土となっている。上層と下層には多くの炭・焼土を含んでいる。瓦器、土師器、瓦質土器、陶磁器が出土している。



図3 沢遺跡位置図

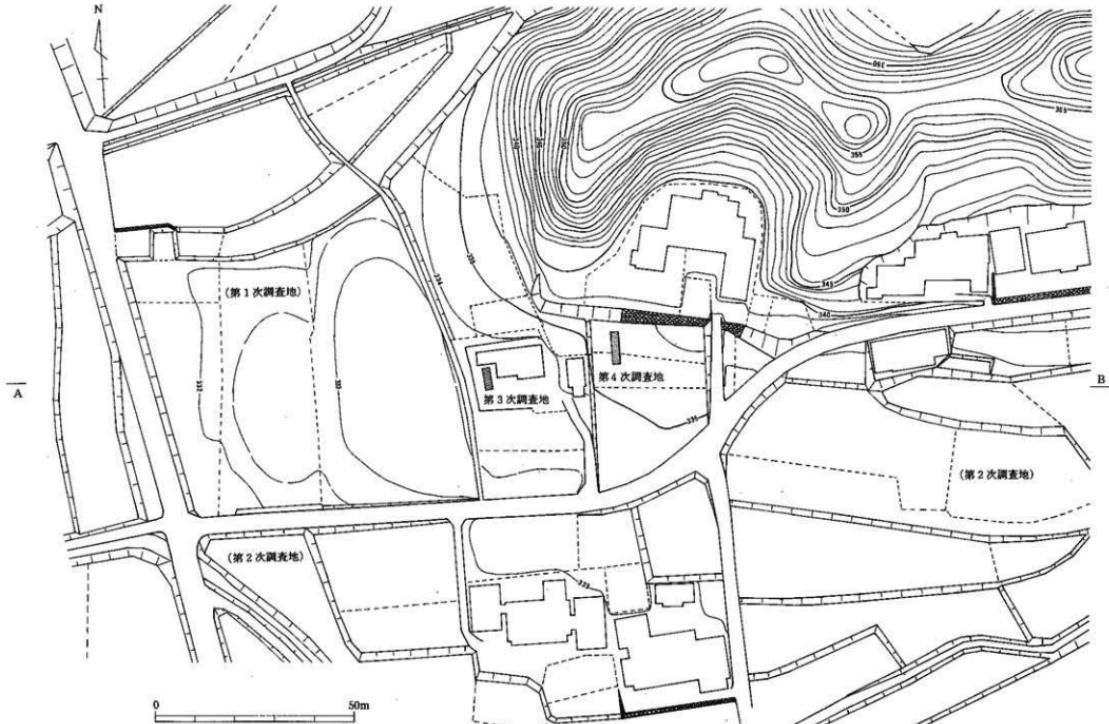


図4 沢遺跡地形測量図

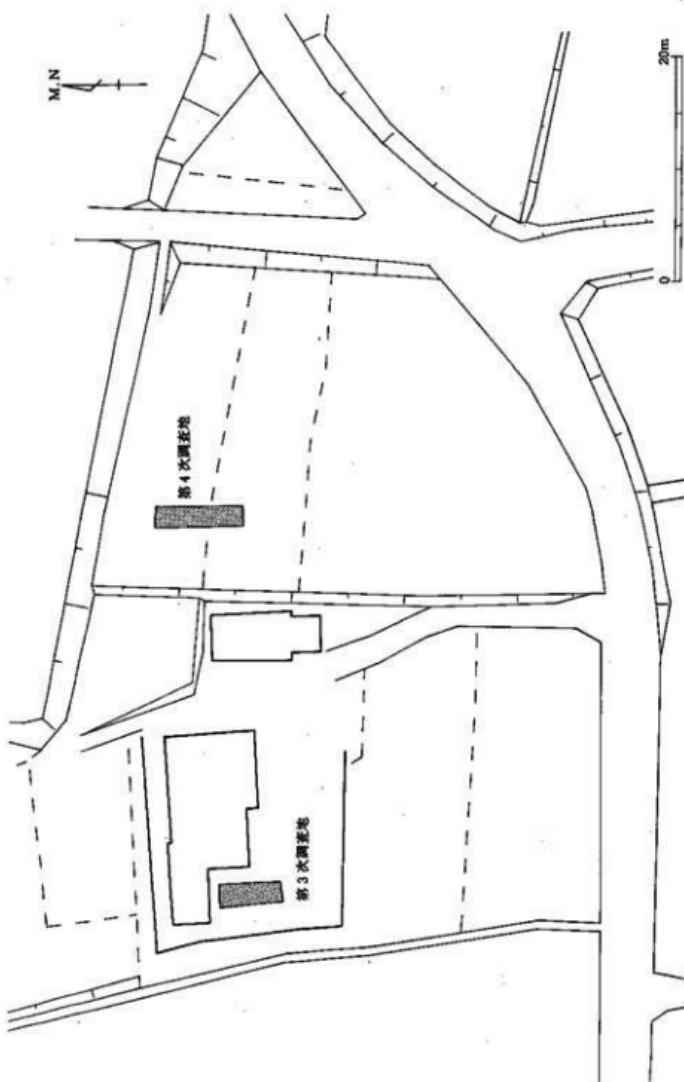


图5 沟道沟第4次调查位置图

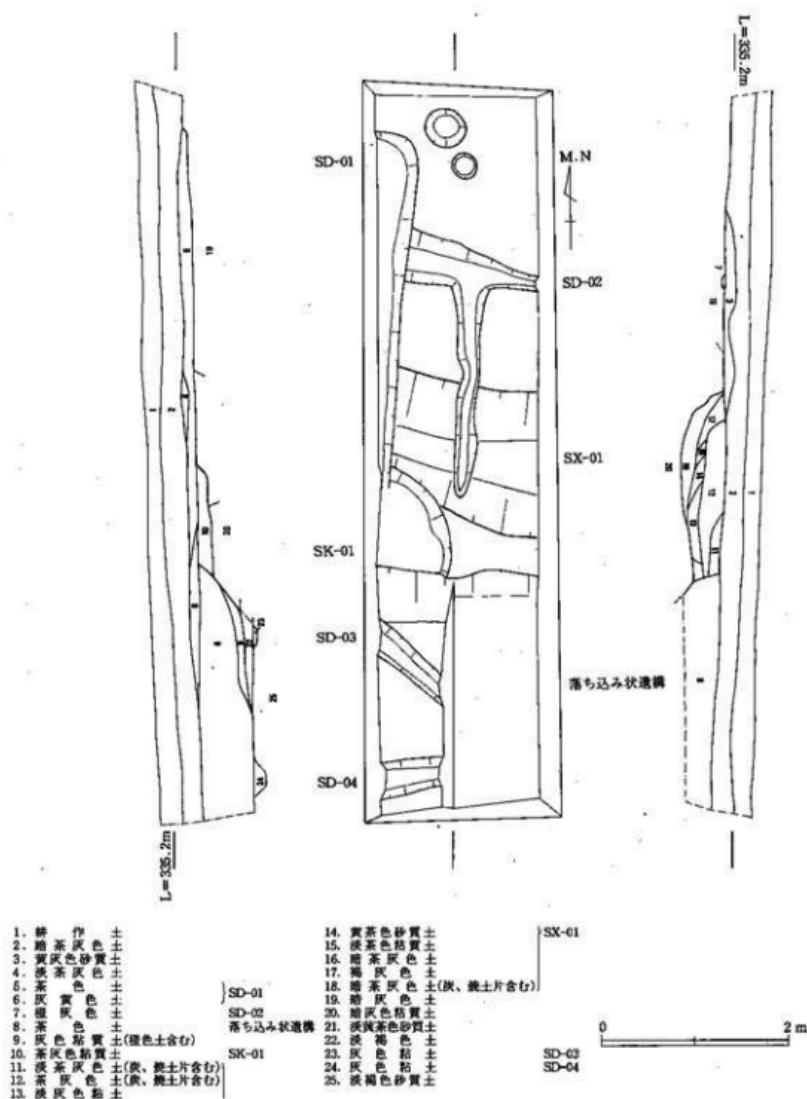


図6 沢遺跡第4次調査検出遺構実測図

溝 3 (SD-03)

一部を検出したにすぎないが、延長 1m 以上、幅 30cm、深さ 7cm を測る。灰色粘質土の埋土中からは、須恵器、黒色土器、瓦器が出土している。

溝 4 (SD-04)

一部を検出したにすぎないが、延長 0.7m 以上、幅 40cm、深さ 5cm を測る。灰色粘質土の埋土中からは瓦器・土師器が出土している。

表4 沢遺跡第4次調査主要検出遺構一覧表

	規 模	平面形態	出 土 遺 物	埋 土	備 考
溝 1 (SD-01)	延長 3.8m 以上 深さ 5~8cm		瓦器、土師器	茶灰色土	17世紀 以降
溝 2 (SD-02)	延長 3m 以上 深さ 2~8cm	T字状	須恵器、瓦器、土師器、陶磁器	橙灰色砂	17世紀 以降
落ち込み状遺構	深さ 50cm		瓦器、土師器、陶磁器	茶色土	17世紀 中葉
土 坑 1 (SK-01)	推定径 0.8~1m 深さ 約 25cm	円 形	須恵器、瓦器、土師器	茶灰色粘質土	15世紀 中葉?
溝状遺構 1 (SX-01)	延長 2m 以上 幅 約 1.6m 深さ 約 50cm		須恵器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶磁器	炭・焼土を多く含む 茶灰色土はか	14世紀後半~ 15世紀前半
溝 3 (SD-03)	延長 1m 以上 幅 約 30cm 深さ 7cm		須恵器、黒色土器、瓦器	灰色粘質土	13世紀後半~ 14世紀前半?
溝 4 (SD-04)	延長 0.7m 以上 幅 約 40cm 深さ 約 5cm		瓦器、土師器	灰色粘質土	13世紀後半~ 14世紀前半?

(3) 出土遺物

調査面積は僅かではあったが、整理第2箱相当の遺物が出土し、その大半は中世の土器で占められている。土器は須恵器、黒色土器、瓦器、土師器、瓦質土器などに加えて、細片ではあるものの信楽、瀬戸、伊万里、唐津などの国産陶器類と輸入陶磁などが認められる。なお、図示した土器の法量・特徴等の詳細は表5の観察表に登載している。

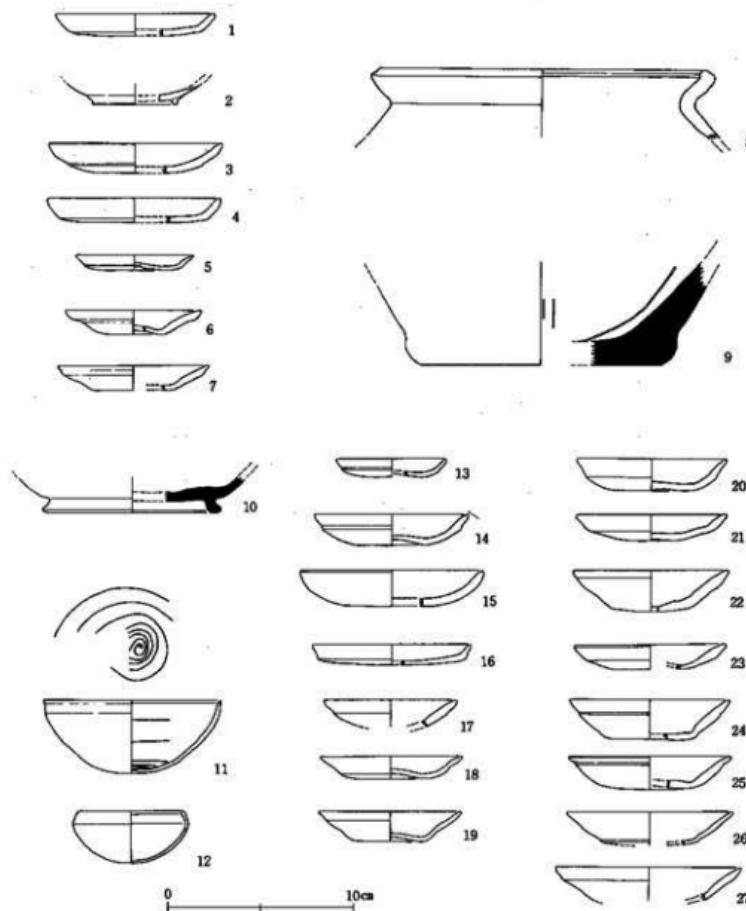


図7 沢遺跡第4次調査出土土器実測図(1)

溝 1 (SD-01) 出土遺物

出土量は僅かで、瓦器碗と土師皿（図7-1）の破片が出土したにすぎない。

溝 1 (SD-02) 出土遺物

図示できないが、須恵器、瓦器、土師器、陶磁器の細片が出土している。17世紀代の信楽焼の擂鉢も認められる。

落ち込み状遺構出土遺物

瓦器、土師器、陶磁器の細片が出土しており、国産陶磁器類では伊万里の碗、輸入陶磁では、明の染付け碗も認められる。これらのうち、瓦器碗1点（図7-2）、土師皿（図7-3～7）、土釜1点（図7-8）、信楽 擾鉢（図7-9）を図示している。擂鉢の胎土は荒く、焼き締め以前の様相を呈する。

土坑 1 (SK-01) 出土遺物

須恵器、瓦器、土師器、の細片が出土しているが、図示できない。

溝状遺構 (SX-01) 出土遺物

検出遺構中、最も多く遺物が出土しており、須恵器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶磁器が認められる。これらのうち、須恵器杯（図7-10）、瓦器碗（図7-11）、土師器小形鉢（図7-12）、土師皿（図7-13～27）を図示している。図示できないが、瀬戸 灰釉平碗も出土している。

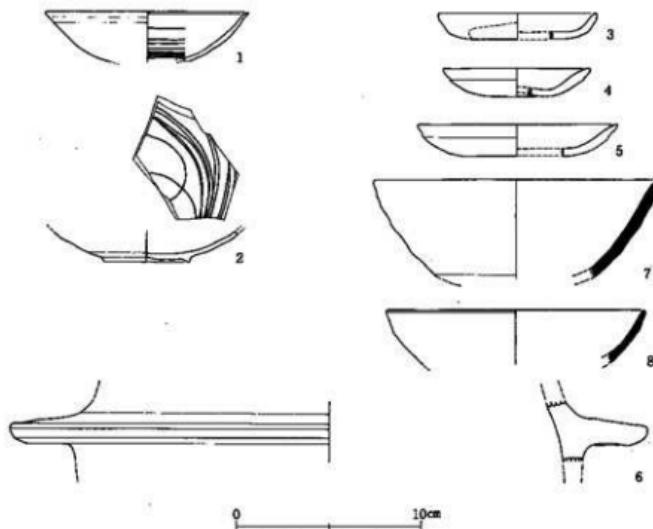


図8 沢遺跡第4次調査出土土器実測図(2)

溝 3 (SD-03) 出土遺物

須恵器、黒色土器、瓦器の細片が出土しているが、図示できない。

溝 4 (SD-04) 出土遺物

瓦器、土師器の細片が出土しているが、図示できない。

第2層出土遺物

須恵器、瓦器、土師器、陶磁器のほか、鉄釘が出土している。これらのうち土器類は、瓦器楕(図8-1~2)、土師皿(図8-3~5)、土釜(図8-6)、瀬戸灰釉平碗(図8-7)、京焼風碗(図8-8)を図示している。陶磁器のほかには、唐津碗や白磁碗なども認められる。鉄釘(図9-1)は、その先端部分が欠損しており、現存長5.3cm、幅0.7~0.8cmの角釘である。もう1点の鉄釘(図9-2)は、頭部を欠損する現存長3.8cm、幅0.3cmの角釘で「し」の字状に曲がる。

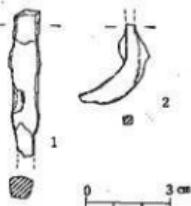


図9 沢遺跡第4次調査出土鉄釘実測図

表5 沢遺跡第4次調査出土土器調査表

辨識番号	出土位置	縦幅・横形	法量(cm)	法量の特徴	技法の特徴	色調	備考
7-1 寺 (SD-01)	土 壁皿 器	復元口径 高	8.6 1.2	口縁部-外縁状に上方に立ちあがり、細い底部-やや丸みをもつ平底	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/3の断片
7-2 落ち込み状縁 瓦器	土 壁皿 器	復元高台径 4.6	高 台-逆三角形状の臺り付け高台	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	灰色	1/3の断片	
7-3 落ち込み状縁	土 壁皿 器	復元口径 高	9.4 1.6	口縁部-内縁状に立ちあがる	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/5の断片
7-4 落ち込み状縁	土 壁皿 器	復元口径 高	9.4 1.3	口縁部-内縁状に立ちあがる	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	橙色	1/5の断片
7-5 落ち込み状縁	土 壁皿 器	復元口径 高	6.4 0.8	口縁部-外縁状に立ちあがる	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/2の断片
7-6 落ち込み状縁	土 壁皿 器	復元口径 高	7.4 1.3	口縁部-外縁状に上方に立ちあがる	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/3の断片
7-7 落ち込み状縁	土 壁皿 器	復元口径 高	9.6 1.3	口縁部-外縁状に直線的に立ちあがる	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/4の断片
7-8 落ち込み状縁	土瓶 土釜	復元口径 高	17.4 (底口A)	口縁部-外縁状に安形、端部は上方へ屈曲	内面-ナード-焼ナデ 外面-ナード-焼ナデ	にぶい褐色	1/7の断片
7-9 落ち込み状縁	陶器 瓶 (信楽)	復元底部径 13.0	底 高	口縁部-内縁状に開く	内面-指圧-断痕 外面-ナード-焼ナデ	浅黄色	1/6の断片
7-10 落 状 連 桟	須恵器 杯	復元高台径 9.6	高 台-外縁状に開く	内外面とも回転ナデ	内面-灰白色 外面-灰白色	1/6の断片	
7-11 落 状 連 桟 瓦器	復元口径 高	9.6 3.9	体-第一内縁-狭い 口縁部-外縁 第一-先端	内面-ナード-焼ナデ-低い 溝地を吹き出し 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	3/4の断片		
7-12 落 状 連 桟	土瓶器 小形杯	復元口径 高	5.4 2.8	体-内縁-狭い 口縁部-内縁し端部は丸い 底部-先端	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	浅黄色	1/2の断片
7-13 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	6.0 1.0	口縁部-内縁状に立ちあがる 底 第一-中央部が上げ広がり	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/3の断片
7-14 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	8.4 1.6	口縁部-やや内側見ゆで上方に立ちあがり、 端部はやや外反消失	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	にぶい褐色	1/3の断片
7-15 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	9.8 1.9	口縁部-内縁状に立ちあがる	(内外面とも厚底)	橙色	1/5の断片
7-16 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	8.6 1.1	口縁部-外上方に立ちあがり、細い底部-やや丸みをもつ平底	内面-ナード-焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	橙色	1/5の断片
7-17 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	7.2 1.2	口縁部-外縁状に直線的に立ちあがる やや外反消失	内面-ナード-口縁部は焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	はぼ形	はぼ形
7-18 落 状 連 桟	土 壁皿 器	復元口径 高	7.8 1.2	口縁部-外縁状に直線的に立ちあがり、端部は全体が上げ底	内面-ナード-右縁部は焼ナデ 外面-指圧-口縁部は焼ナデ	完 形	完 形

探査番号	出土位置	器種・器形	法 量 (cm)	形 異 の 特 徴	注 法 の 特 徴	色 調	備 考
7-19	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 1.6	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり 底部-全体が上げ底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	明赤褐色	1/2の繩片
7-20	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 8.0	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、端部は やや外反弧度、底部-中央部が上げ底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/4の繩片
7-21	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 1.7	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、端部は やや外反弧度、底部-中央部が上げ底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	明赤褐色	1/4の繩片
7-22	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 1.3	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、端部は やや外反弧度、底部-中央部が上げ底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/4の繩片
7-23	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 2.2	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、 底部-底部-やや丸みをもつ平底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/4の繩片
7-24	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 1.3	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、 底部-底部-平底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	内面-明褐色 外面-褐色	1/3の繩片
7-25	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 1.8	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、端部は やや外反弧度、底部-中央部が上げ底	内面-ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/5の繩片
7-26	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 9.0	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、端部は 丸み	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	明褐色 内面-褐色 外面-褐色	1/5の繩片
7-27	溝 状 通 槽	土 壁 器	復元口径 高 10.0	口縁部-外縁状に直線的に立ち上がり、 底部-底部-平底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/5の繩片
8-1	第 2 層 瓦 器	土 壁 器	復元口径 高 11.0	底部-やや内凹 口縁部-内側に比較、端部を外反	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	内面-灰白色 外面-灰白色	1/5の繩片
8-2	第 2 层 瓦 器	土 壁 器	復元高台径 高 4.6	高 合-逆三角形状の短い張り付け高台	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧	褐色	1/3の繩片
8-3	第 2 层 瓦 器	土 壁 器	復元口径 高 1.4	口縁部-内縁状に立ちあがる 底部-平底	(内外面とも岸鏡)	褐色	1/2の繩片 接合鏡
8-4	第 2 层 瓦 器	土 壁 器	復元口径 高 1.5	口縁部-外縁状に上方に立ちあがる 底部-中央部が上げ底	内面-ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	褐色	1/4の繩片
8-5	第 2 层 瓦 器	土 壁 器	復元口径 高 1.7	口縁部-外縁状に上方に立ちあがる 底部-平底	内面-ナデ→右側ナデ 外面-指圧→ロ繩部は焼ナデ	浅黄褐色	1/5の繩片
8-6	第 2 层 瓦 器	土 壁 器	復元口径 高 34.4	口-比較的の幅の広い縫を水平方向に張り付ける	内面-ナデ	内面-明褐色 外面-褐色	1/6の繩片 縫下方に深 竹管
8-7	第 2 层 陶 器	土 壁 器	復元口径 高 15.2	底部-内縁状に上方に立ちあがる	内面-回転ナデ→上蓋	浅黄色	1/5の繩片
8-8	第 2 层 陶 器	土 壁 器	復元口径 高 13.8	底部-内縁状に上方に立ちあがる	内面-回転ナデ→上蓋 外面-回転ナデ→上蓋	浅黄色	1/10の繩片

4 ま と め

沢遺跡からはこれまでに縄文時代中期末葉から縄文時代晚期、弥生時代前期から後期の土器が出土しており、このなかでも縄文時代後期前葉、弥生時代中期（第Ⅲ様式）から弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器が多く確認されている。明確な遺構は検出されていないものの、この頃に盛期を迎える芳野川流域の主要集落のひとつと考えられる。

今回、農業用倉庫建設にともなう基礎工事が地中の遺構まで及ぼす、これらの遺構を保存できることとなったため、より下層の遺構調査を十分に実施していないが、縄文時代～弥生時代の遺物が出土していないことから、この時期の遺構は当調査地には存在していない可能性が高い。検出遺構の時期は、遺構の前後関係や出土土器から以下とおりと考えられる。溝2（SD-02）からは、17世紀代に比定される信楽焼の壺鉢が出土しており、これ以後に溝1（SD-01）がつくられている。なお、溝1（SD-01）からは、川越編年の第Ⅲ段階B型式～D型式、松本編年の南SK-01期～土坑10下層期に比定される瓦器碗が認められる。落ち込み状遺構からは川越編年の第Ⅲ段階A型式～B型式、松本編年の井戸20期～南SK-01期に比定される13世紀代の瓦器碗等のほか、15世紀後葉～16世紀前葉の明の染付け碗、17世紀中葉の伊万里碗等が出土しており、17世紀中葉がこの遺構の時期であろう。溝状遺構（SX-01）からは川越編年の第Ⅳ段階B型式～D型式、松本編年の山ノ内大溝期に比定できる瓦器碗が出土しており、14世紀中葉～15世紀前葉の時期が考えられる。溝3（SD-03）、溝4（SD-04）の明確な時期を明らかにできないが、13世紀後葉～14世紀前葉に比定できる瓦器碗の細片が出土している。

調査を実施した畑地一帯には、出土遺物から13世紀後半葉から17世紀中葉に至る中近世の建物遺構等が広がっていることが十分予想でき、これらのうち、沢城に関連した遺構の存在も考えられる。ちなみに、調査地及びその周辺は「小倉前」、「小倉屋敷」などの小字名となっており、沢氏に仕えたという「小倉氏」との関係が興味深い。

沢遺跡は縄文時代中期以降、現代に至るまで生活の営みが継続しているが、必ずしもその全容が明かになっているとはいえない。このためには、まず、この遺跡の基本的な確認調査を実施し、周辺遺跡との関係をさらに考慮しつつ、この遺跡の占める位置を明確にしていかなければならないと考えている。

5 抄 錄

遺 跡 名 沢遺跡（榛原町遺跡地図番号 2-544、奈良県遺跡地図番号15-D-84）
調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字沢1411-1番地（小字名：小倉前）
遺 跡 規 模 範囲：南北約110m、東西約120m、面積：約12000m²
種 別 繩文時代～中世の遺物散布地・集落跡
調 査 主 体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 柳澤一宏）
調 査 原 因 個人による農業用倉庫建設工事
現地調査期間 1992年11月17日～1992年11月30日
調 査 面 積 約16m²
検 出 遺 構 ピット、溝、土坑 他
検 出 遺 物 須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器（整理箱 2箱）
資料等の保管 榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 岡崎晋明他『大和考古資料目録』第14号「奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1987」

註2) 楠元哲夫他「宇陀地方の遺跡調査 昭和62年度」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』 奈良県立橿原考古学研究所 1989

註3) 柳澤一宏『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1990年度』 榛原町教育委員会 1991

註4) 柳澤一宏『下城・馬場遺跡』 榛原町教育委員会 1985

註5) 井上義光他「宇陀地方の遺跡調査 昭和60年度」『奈良県遺跡調査概報 1985年度』 奈良県立橿原考古学研究所 1986

註6) 井上義光『野山遺跡群 I』 奈良県立橿原考古学研究所 1988

井上義光『野山遺跡群 II』 奈良県立橿原考古学研究所 1989

註7) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983

註8) 松本洋明他『十六面・薬王寺』 奈良県立橿原考古学研究所 1988

註9) 大門貞夫『沢氏および沢城をめぐるキリストン』 1992

IV 高塚遺跡第3次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査史抄

高塚遺跡は、1937年（昭和12年）の道路工事の際に、弥生時代後期の土器・石器・木製品・自然遺物等が出土したため、その存在が明らかとなった遺跡で、翌年、『大和志』や『考古學』にその概要が報告されている。これらによると道路の南北両法面には風化花崗岩を穿った堅穴状遺構（黒色包含層・黒褐色有機質土）が認められ、弥生土器・木製品・自然遺物などが出土している。現在、この正確な場合は明らかにできないものの、堅穴状遺構は、その検出状況及び遺物の出土状況から住居跡ではなく、北の尾根部から南の谷部へと流れる溝であった可能性が考えられる。また、地元・高塚在住の松岡良彰氏は、以前から高塚遺跡から出土した土器・木製品を保管され、これらは『榛原町史』や『大王山遺跡』等で資料紹介が行われている。^{出1)} ^{出2)}

1971年（昭和46年）には、この道路拡幅に伴い奈良県立榛原考古学研究所によって発掘調査（第1次調査）が行われ、溝やピット等の遺構、弥生時代中期から後期の土器・木製品・ガラス玉・銅鏡などの遺物が検出されている。^{出3)} 1989年（平成元年）には、榛原町教育委員会が下水道工事に伴い発掘調査（第2次調査）・立会調査を行ったところ、明確な遺構は検出できなかったものの、弥生時代後期から古墳時代前期（布留2式）の土器片等が出土している（図11）。^{出4)}

(2) 調査の契機と経過

高塚遺跡内に「鷹塚」と呼ばれている古墳状の隆起があり、その西隣に個人の農業用倉庫が建設されることとなつたため、1992年11月17日付けで埋蔵文化財発掘調査届が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行ったところ、榛原町教育委員会が平成4年度国庫・県費補助事業として発掘調査を担当することとなつた。現地調査は1992年11月30日から1992年12月15日にかけて実施（実働10日）し、以後、1993年3月31日まで整理作業等を行つた。なお、後述の検出遺構は、土のう袋で保護し、埋め戻しを行つてある。また、「鷹塚」の南西に位置する「犬塚」の測量調査も行い、発掘調査成果の検討資料とした。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）

調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、森塚和彦、柳沢淳子、山本美恵子、中平穎子、村井田悟

藤井隆弘

調査作業員 柳沢雅子

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

航空写真撮影 岡本組

調査協力 松岡良彰、久我清司

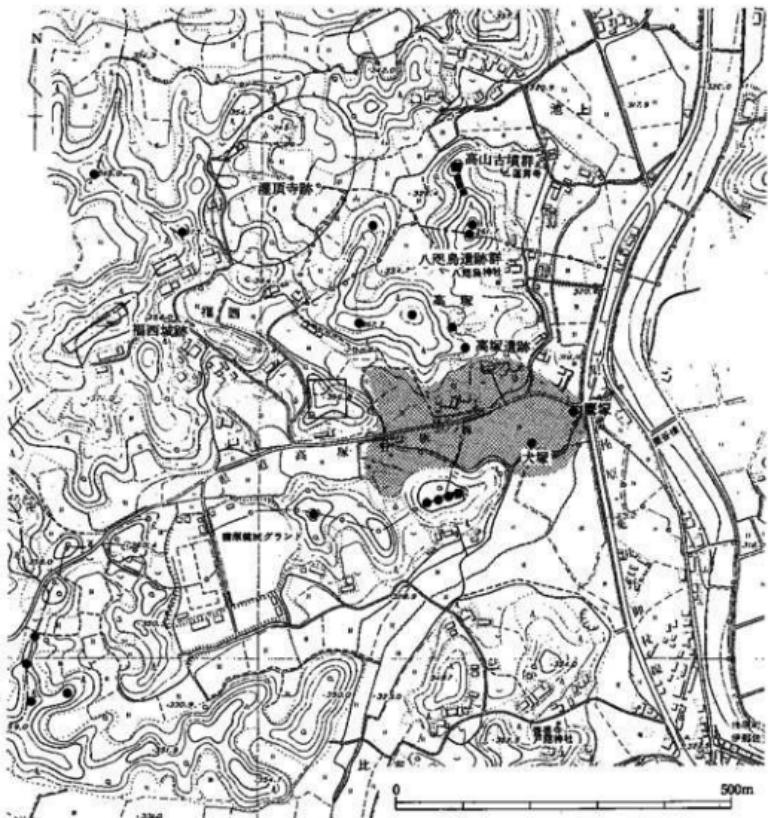
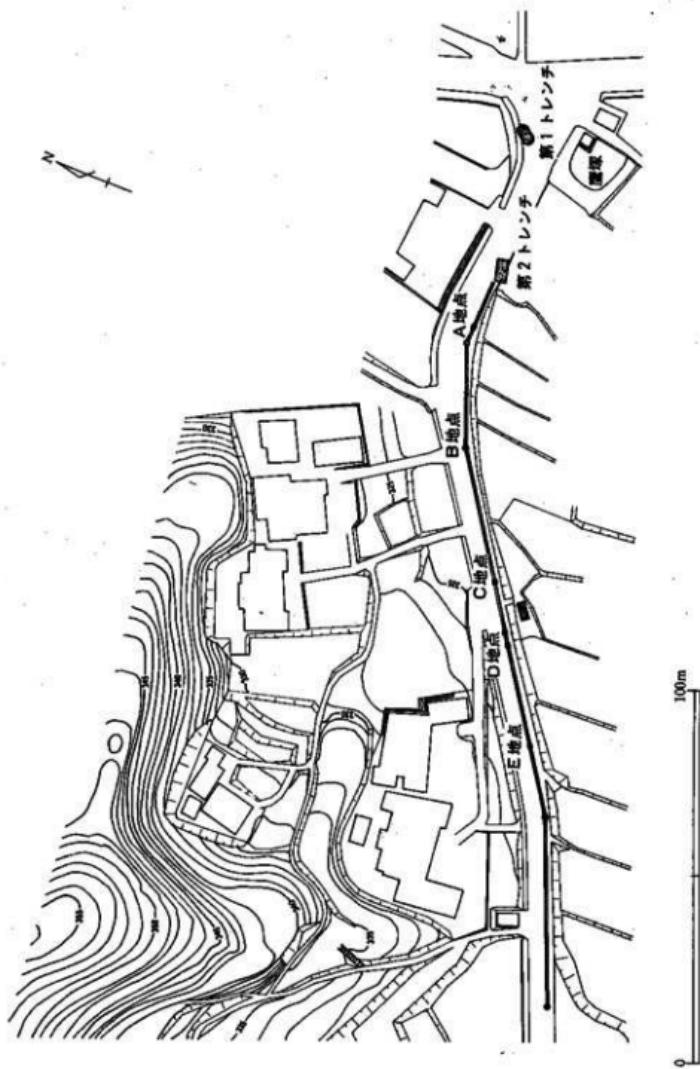


図10 高塚遺跡位置図

図11 高家遺跡第2次調査位置図



(3) 現地調査日誌抄

1992年(平成4年)

11月30日(月)

トレッセを設定し、掘り下げを開始

12月1日(火)

掘り下げ作業。東半部で地山を検出。西半部は灰
色土の落ち込み。鷹塚に伴う溝か。

12月2日(水)

鷹塚測量杭設置。トレッセ西半部掘り下げ。中世
土器片出土。

12月3日(木)

トレッセ西半部掘り下げ作業。V字状の溝検出。
犬塚草刈り作業。

12月4日(金)

写真撮影。鷹塚地形測量。

12月5日(土)

午前、鷹塚地形測量。

12月9日(水)

トレッセ埋め戻し。

12月10日(木)

犬塚測量杭設置。

12月11日(金)

午前中、トレッセ埋め戻し。

12月14日(月)

犬塚地形測量。

12月15日(火)

犬塚地形測量。犬塚、鷹塚写真撮影。

2 位置と環境

高塚遺跡は、芳野川中流域の左岸に立地し、芳野川へと淮々西方から的小支流によって形成された谷部分もその範囲に含まれている。榛原町の市街地からは、約3km南方に位置し、町境ともなっている西方の丘陵を越えると、すぐ大字陀町へと至る。現在、この遺跡は榛原町高塚と大字陀町野依とを結ぶ道路によって尾根部分と谷部分との南北に分断された格好となっており、これまでにこの道路を中心として発掘調査等を重ねている。周辺では、高山古墳群、八咫烏遺跡群、福西遺跡などの発掘調査が行われている(図10、図版6)。一方、芳野川の対岸には当地の高峰・伊那佐山や沢城跡などを仰ぎみることができる。ちなみに、大字名の高塚とは、多くの塚(古墳)が位置することに由来している。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

「鷹塚」の西方に長さ約3m、幅約2mのトレッセを設定し、遺構・遺物の検出につとめた結果、現代の整地土・旧耕作土の直下から断面形態がV字状を呈する深さ約1.1mの溝を検出することができた。現地表面から遺構検出面までは約0.7cmである(図12・13、図版7)。

(2) 遺構

溝の大半は調査範囲外にあるため、延長約1.8mを検出したのみで、その全容は明らかにできない。西端が未確認ではあるものの、断面形態の復元から幅は2m前後と推定できる。溝埋土は粘質土が多い上層（図13-5～10）、砂質土が多い中層（図13-11～13）、砂の下層（図15-14～17）の3層に大別できる。下層埋土の状況から南から北への流水があったと考えられる（図13、図版7）。

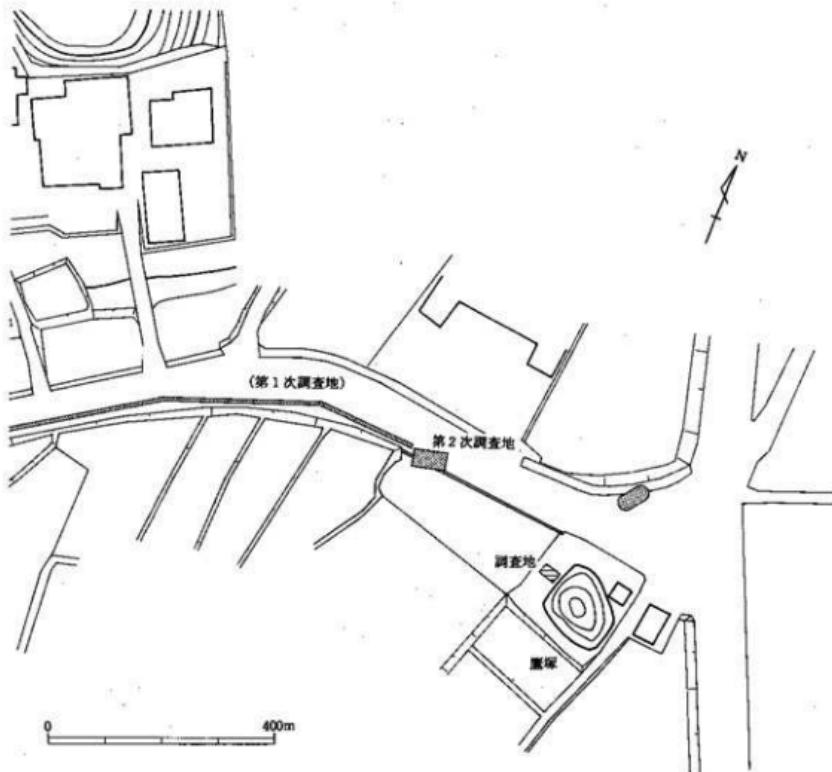


図12 高塚遺跡第3次調査位置図

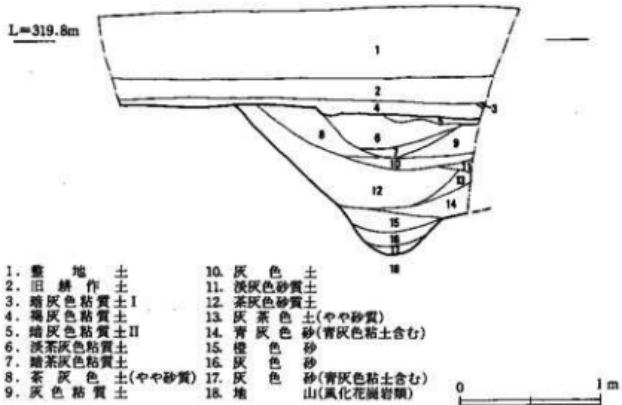
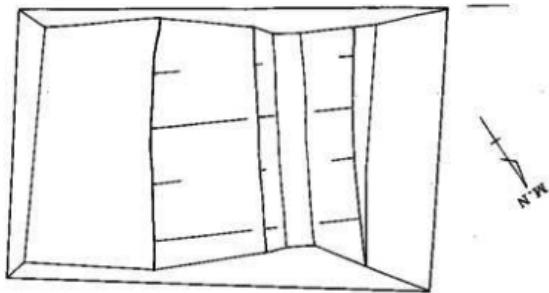
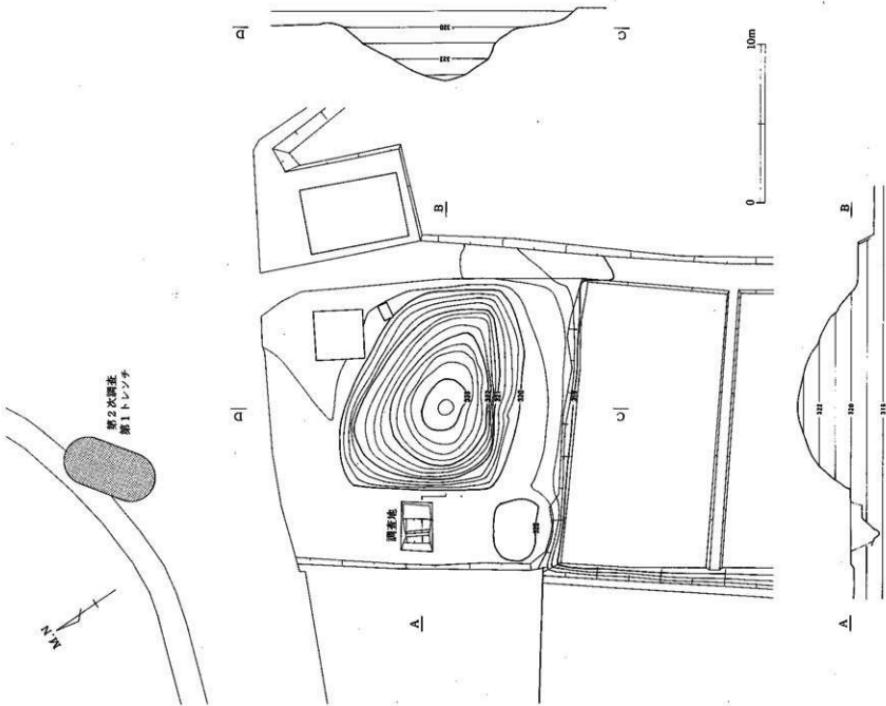


図13 高塚遺跡第3次調査検出遺構実測図

図14 蔵塚測量図



(3) 出土遺物

構内からは、奈良時代～平安時代の須恵器蓋、室町時代の瓦器碗、土師皿・甕などが出土しているが、細片のため図示したものは中層から出土した土師皿1点（図15）のみである。土師皿は復元口径9.8cm、器高1.5cmの小形土師皿である。口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は平底である。口縁部外面は横ナデ、底部内面中央はナデを施し、底部外面は未調整で指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。瓦器碗は細片ではあるが、底部内面には連結輪状文が認められ、川越編年の第II段階B型式、松本編年の²³⁾土坑-01下層期～南SE-21下層期に比定でき、12世紀中葉の年代が考えられる。

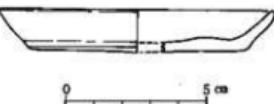


図15 高塚遺跡第3次調査出土遺物実測図

(4) 鷹塚の測量調査

調査地の東に「鷹塚」と呼称される古墳状のマウンドが認められる。検出遺構との関連も考えられるため、地形測量調査を行った。鷹塚の四周は道路、倉庫、水田、畠地等になっており、その裾部及び斜面は改変を受け、本来の平面形態は明らかでない。現状では標高320mの等高線がその裾部を形成しており、西・南が方形、北東が円形を呈している。規模は南北11m、東西15m、高さ約3.5mの規模を有する。頂上部には「鷹塚」の石柱が建てられている（図14、図版6）。

(5) 犬塚の測量調査

「鷹塚」の南西約80mの谷水田中に「犬塚」と呼称されている小塚が位置している。水田によつて裾部は削平を受けており、比較的旧形をとどめているのは、西側の一部に過ぎない。塚の頂上部から東斜面にかけて「犬塚」の石柱、庚申塔、大峰山信仰による嘉永二年銘の供養塔などの石造物7基が設置されており、その際、若干の地形改変が行われている。現状では標高321mの等高線がその裾部を形成しており、南北約8m、東西約10m、高さ約2.5mの規模を有する。本来は、直径約10m、高さ3m以上の円墳状を呈していたものと考えられる。犬塚の築成にあたっては、人頭大の石を含む盛土によっているものと推定される。周辺の古墳は尾根上に立地しているが、「犬塚」は谷水田中の低地の立地し、その様相には明らかに相違が認められる。築造時期を示す遺物は認められない（図16、図版8）。

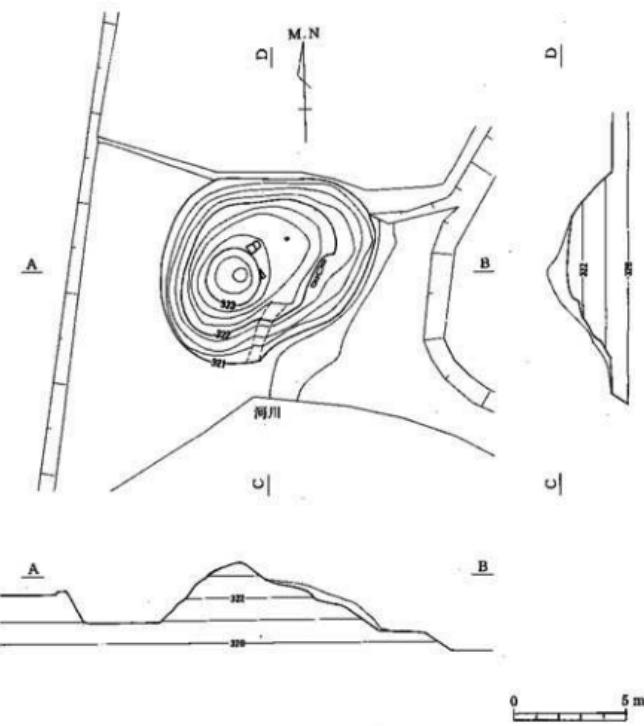


図16 大塚測量図

4 まとめ

「鷹塚」の本来の形状は四周が削られ明らかでないが、今回の発掘調査で検出した溝を「鷹塚」に伴う溝とすると、その規模及び形状は、一辺約15m方形に想定できる（図17）。南辺の直線的にのびる裾部とも合致し、ある程度の「鷹塚」規模が推察できる。「鷹塚」は北から南へと谷部分に張り出した小尾根の地山を整形したのち、ある程度の盛土を施していると考えられるが、溝内の出土遺物や立地から古墳時代の「塚・古墳」ではなく中世から近世の塚、いわゆる「古墳でない塚」と考えられる。なお、先述の「犬塚」もこれと同様の塚であろう。

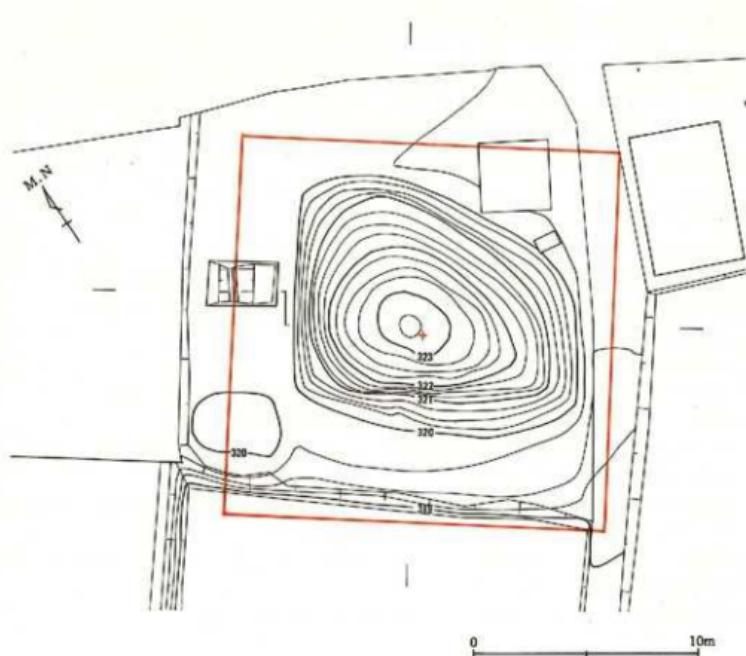


図17 鷹塚推定復元図（案）

6 抄 錄

遺 跡 名 高塚遺跡（榛原町遺跡地図番号 2-355・2-356・2-357）
(奈良県遺跡地図番号 15-B-129・15-B-130・15-B-131)

高 塚
聚 落
大 家

調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字高塚121番地

遺 跡 立 地 標高約320～330mの丘陵裾・谷部

遺 跡 規 模 南北：180m、東西：300m、面積：約54000m²

種 別 弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地・集落跡

調 査 主 体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 柳沢一宏）

調 査 原 因 個人による農業用倉庫建設工事

現地調査期間 1992年11月30日～1992年12月15日

調 査 面 積 6 m²

検 出 遺 構 溝

検 出 遺 物 須恵器、土師器、瓦器（整理箱1箱）

資料等の保管 榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 烏本一「大和国宇陀郡伊那佐村高塚の弥生式土器」『大和志』5-3 大和国史会 1938

註2) 藤野勝弥「奈良県宇陀郡伊那佐村高塚弥生遺跡」『考古學』9-3 東京考古学会 1938

註3) 『榛原町史』 榛原町役場 1959

註4) 伊藤勇輔他「大王山遺跡」 榛原町教育委員会 1977

註5) 河上邦彦「高塚弥生遺跡の発掘調査」『青陵』19 奈良県立橿原考古学研究所 1972

註6) 柳澤一宏「高塚遺跡第2次発掘調査概要報告書」 榛原町教育委員会 1980

註7) 楠元哲夫他「宇陀地方の遺跡調査―昭和63年度―」『奈良県遺跡調査発報 1989年度』 奈良県立橿原考古学研究所 1990

註8) 松永博明他「宇陀地方の遺跡調査―昭和61年度―」『奈良県遺跡調査発報 1987年度』 奈良県立橿原考古学研究所 1986

註9) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983

註10) 松本洋明他「十六面・薬王寺遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所 1988

V 殿垣内遺跡発掘調査概要報告

1 調査の契機と経過

(1) 調査の契機と経過

本遺跡は、榛原町遺跡地図に未登載ではあるものの、周辺での遺跡分布から広義の能峠遺跡群に含まれる中世の遺物散布地と考えている地点である。この一部の水田において、農地転用後、個人住宅が建設されることが明らかとなり、1992年（平成4年）12月16日には埋蔵文化財発掘届が事業者から提出された。その後、関係者が調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会が平成4年度国庫・県費補助事業として榛原町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。現地調査は1993年3月11日と12日の2日間実施した。なお、遺跡名は垣内名を用いて殿垣内遺跡とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会

調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課

調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、山本美恵子

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

調査協力 笹次 蔦、竜美建設

(2) 現地調査日誌抄

1993年（平成5年）

3月11日（木）

重機による掘り下げ作業。土層断面観察。

3月12日（金）

土層断面図作成。平板測量。重機による埋め戻し作業。

2 位置と環境

殿垣内遺跡は、榛原町の高峰のひとつである伊那佐山から四方へのびる尾根のうち、北西の一支脈によって形成された標高約320～340mの谷部に立地する。この遺跡が位置する谷は南東から北西へと下り、芳野川へと至っている（図18、図版9）。

周辺は、大規模な農地造成工事が実施されており、その際に谷遺跡や能峠遺跡群（北山・南山・西山・中島地区他）などの発掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代にわたる遺跡群として知られているところである。殿垣内遺跡の上流部分には、「殿垣内」という呼称に由来する中世山城・殿垣内城跡（能峠遺跡群西山地区）、南の尾根上には5世紀中の前山1号墳^{注2)}が立地する。

3 遺跡の調査

調査地は、過去に圃場整備が行われており、一部において地形の改変を受けてはいるものの、遺物が包含されていると予想されたため、事業地の中央部分においてトレーンチを設定した（図19）。

基本層序は、第1層が圃場整備に伴う整地土層（約1.5m）、第2層が灰色粘土層（約1.1m）、第3層が暗青灰色粘土層（約0.5m）、第4層が黄灰色粘土層（約0.6m）となっている。第2層中より瓦器碗片が出土しているほかは、明確な遺構・遺物は認められない（図20、図版9）。



図18 墓垣内遺跡位置図

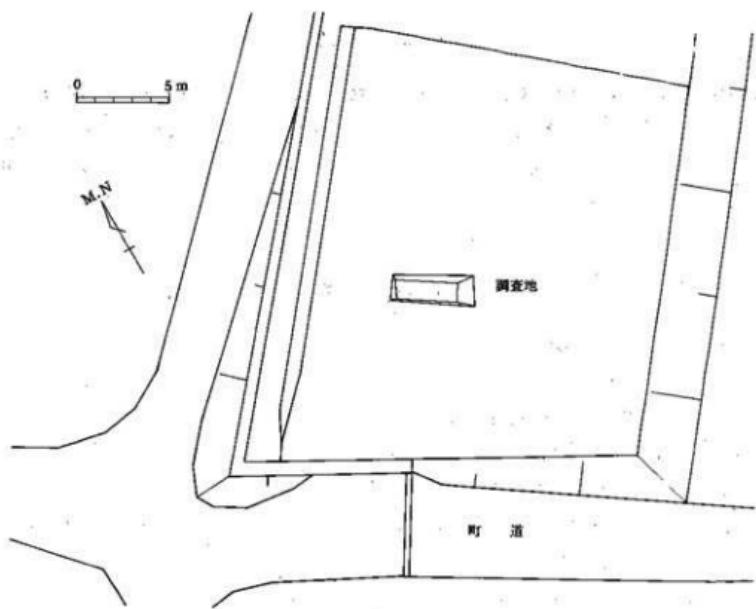


图19 殿垣内遺跡調査位置図



图20 殿垣内遺跡柱状土層断面図

4 まとめ

調査地からは若干の土器片を検出したものの、遺構は確認できなかった。層序から調査地は過去に埋没した谷に相当し、当時の生活域は上流域の殿垣内城跡及び周辺の尾根根部にあるものと想定される。なお、出土した瓦器碗は細片のため、明確な時期を明らかにできないが、概ね12世紀の範囲におさまるものである。

5 抄 錄

遺 跡 名 殿垣内遺跡

調 査 地 奈良県宇陀郡橿原町大字上井足1199-7番地

遺 跡 立 地 標高約320~340mの谷部

遺 跡 規 模 東西約250m、南北約100~150m

時 代・種 別 中世の遺物散布地

調 査 主 体 橿原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者
柳澤一宏）

調 査 原 因 個人住宅建設工事

現地調査期間 1993年3月11日~1993年3月12日

調 査 面 積 10m²

検 出 遺 構 なし

検 出 遺 物 瓦器（碗）

資料等の保管 橿原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 松本洋明他「宇陀地方の遺跡調査 昭和59年度」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』 奈良県立橿原考古学研究所 1985

註2) 楠元哲夫他『能峠遺跡群 I』 奈良県立橿原考古学研究所 1986

註3) 楠元哲夫他『能峠遺跡群 II』 奈良県立橿原考古学研究所 1987

VI 南山古墳測量調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査史抄

南山古墳は、古くからその存在が知られており、1892年（明治25年）起の『古墳墓調書』や1893年（明治26年）の『大和国古墳墓取調書』には、磚積の横穴式石室が開口した状況が描かれている（図21・22）。『古墳墓調書』には、「天井石武枚ニテ裏切造両側積ニシテ白漆喰壁上昔代彩色セシカ如キ形跡アリ（下略）」とあり、また『大和国古墳墓取調書』では「（上略）此塚ハ羨道既ニ破壊セラレテ唯玄室ノ幾部ヲ存セリ其構造及用石等ハ（中略）今日謂フ所ノ練瓦ノ如キ赤色ヲビタル方尺ナル平石ヲ以テ甃シ「セメント」トモ云フベキ石灰様ノモノヲ用テ堅メ天井ハ切石大小二枚ニテ覆ヒタリ其精工ナル實ニ可驚モノナリ是等ハ延暦以前ノ皇族以上ノ御墓ナラン（下略）」と記され、当時、羨道部が破壊されていたものすでに磚積石室が特異な横穴式石室として注目されていたことを窺い知ることができる。1936年（昭和11年）には田村吉永氏が「大和に於ける磚式古墳」と題し磚積石室の状況を報告され、さらに注目されることとなる（図23）。その後、1972年（昭和47年）の『宇陀福地の古墳』、1975年（昭和50年）の『宇陀・丹切古墳群』において古墳及び石室の状況が調査・報告され、その成果が終末期古墳を研究するうえにおいて貴重な資料となっ



図21 『古墳墓調書』所収の南山古墳



図22 『大和国古墳墓取調書』所収の南山古墳

ている（図26）。また、1982年（昭和57年）には、奈良県立橿原考古学研究所内の磚椁墳研究会によって墳丘の測量調査が行われている。



写真3 南山古墳の横穴式石室

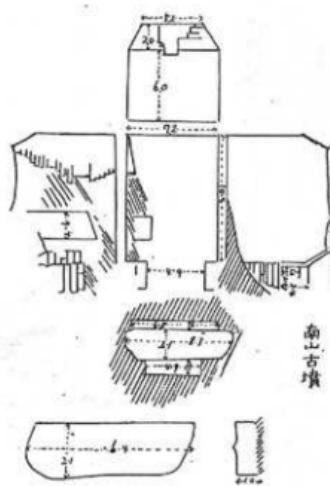


図23 『大和志』所収の南山古墳

(2) 調査の契機と経過

南山古墳は、先述のとおり著名な磚積石室墳であるが、近年、この横穴式石室の崩落が進行しつつある。天井石や側壁の一部は崩落し、古墳の保全上、決して好ましい状況とはいえない。今後、古墳の保存をはかっていくための基本資料を得るために、範囲確認調査を実施することとなり、今年度は、墳丘の地形測量と現状の写真撮影を行った。測量調査等は1992年12月24日から1993年2月18日までの間、断続的に行った。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 棟原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 棟原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）

調査担当者 棟原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、森塙和彦、山本美恵子、久保田由紀、村井田悟、藤井隆弘

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

調査協力 藤村恭之助、楠元哲夫

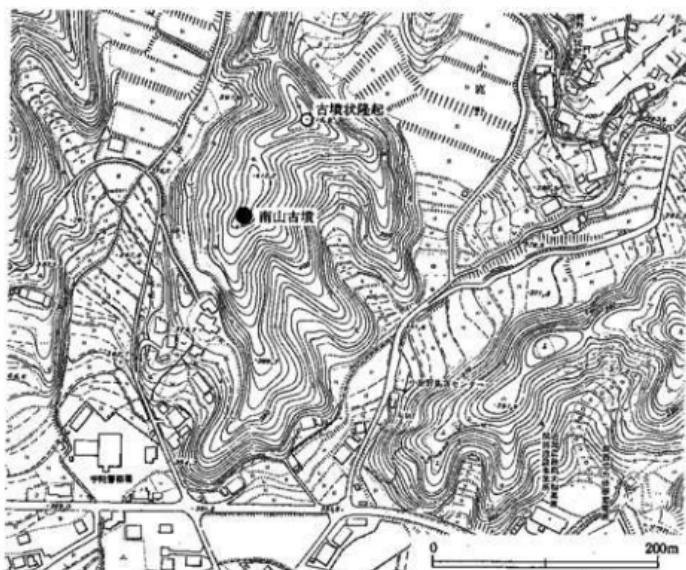


図24 南山古墳位置図

(3) 現地調査日誌抄

1992年（平成4年）

12月24日（火）

伐採作業。

1993年（平成5年）

1月5日（火）

測量杭設置作業。

1月6日（水）

測量杭設置作業。

1月7日（木）

測量杭設置作業。

1月12日（火）

測量杭確認作業。

1月18日（月）

古墳前庭部地形測量。

1月20日（水）

伐採作業。古墳東方地形測量。

2月8日（月）

古墳東方地形測量。

2月9日（火）

伐採作業。古墳北方地形測量。

2月10日（水）

伐採作業。

2月12日（金）

墳丘地形測量。

2月15日（月）

古墳西方地形測量。

2月18日（木）

写真撮影。

2 位置と環境

南山古墳は、鳥見山から南東に派生する一尾根の標高約410～414mの稜線上に立地する。現在は、樹木によりその視界の大半は遮断されてはいるが、眼下には、記紀に登場する「壘坂」をはじめ、弥生時代から古墳時代の遺跡群が広がっている。また、背後には鳥見山、香醉山などの山々が屏風状に聳えている。

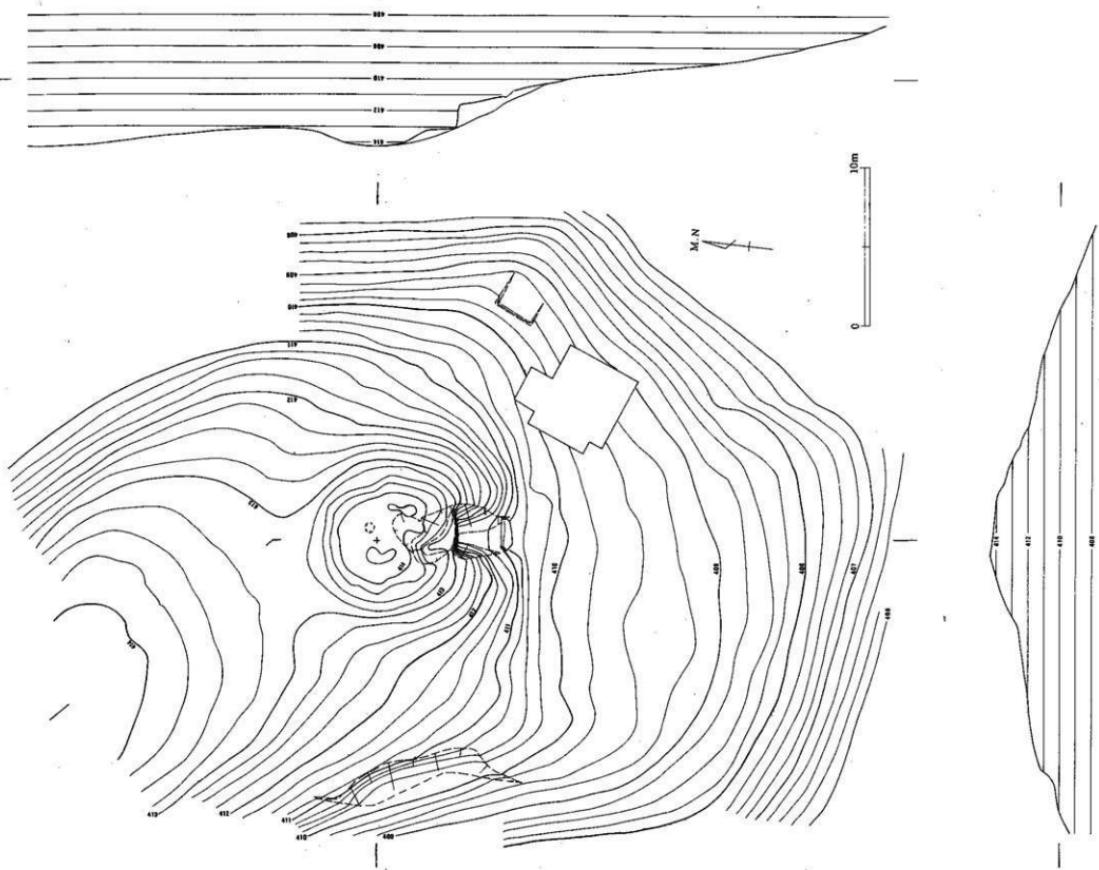
南山古墳が立地する尾根上には、今までのところ他の古墳は認められず、単独で築造されている古墳である。なお、この古墳の北北西約100mの標高約417mの尾根最高所には径6mの古墳状隆起（権原町遺跡地図番号1-17）が認められる（図24）。

3 墳丘測量調査

南山古墳は、北から南へと緩やかに傾斜する尾根稜線上に立地している。この古墳を境として、尾根の主軸は南東から南へとその方向を変えている。

墳丘裾は、南側裾で横穴式石室の搅乱により、いくぶん乱れているほかは、明瞭に認められ、南北18m、東西16mの円墳である。傾斜地に築かれているため、北側と南側とではその高さに相違があり、南側で4.3m、背後の北側で1mとなっている。墳頂部では、南半部分が横穴式石室の崩落によって陥没しているが、直径約5～6mの平坦地となっていたと推定される。

图25 南山古沟测量图



前部は緩やかに南方へ傾斜し、墳丘南西部分では、等高線が一部、直線的にのび、人為的な痕跡を窺い知ることができる。この規模は長さ約20m、幅約20mであろうか。古墳の背後には、深く尾根稜線をカットしているような痕跡は認められないが、幅約2～3mの掘割りが想定できる（図25、図版10）。

4 横穴式石室の現状

南山古墳の横穴式石室（磚積石室）は、先述のとおり既に明治時代には開口している。羨道部は側壁の一部を残し、羨道部の天井石は羨道部に落下しており、その状況は現在もほぼ同様であろう。明治時代と現在との大きさ相違は、玄室の天井石が落下し石室の崩壊が進行しつつあることである。

横穴式石室の規模は、玄室長3.1m、奥壁部分での玄室幅2.2m、袖部での玄室幅1.9m、玄室高2.3～2.0m、玄門幅1.3mである。羨道部は埋没して詳細は明らかにできないが、側壁の一部が残存しているものと推定される。奥壁・側壁は現状では、15～17段の石積が認められ、長さ約30～40cm、厚さ約20cmの比較的まとまった石材を多く試用している。10段前後から上方は厚さ5～10cmの石材を使用している。奥壁・側壁ともほぼ直線的に石材を積み上げているが、いずれも現床面から約1.7mのところで約25～35度内傾させている。玄室の天井石は崩落しているが、実測図によると奥から羨道にむけて除々に下方に傾斜させており、その比高は約20～30cmである。本来、玄室の奥壁・側壁・天井の各面には、全面にわたって漆喰が塗布されていたようであるが、現在もその剥落が進行しつつある（図26、写真3）。

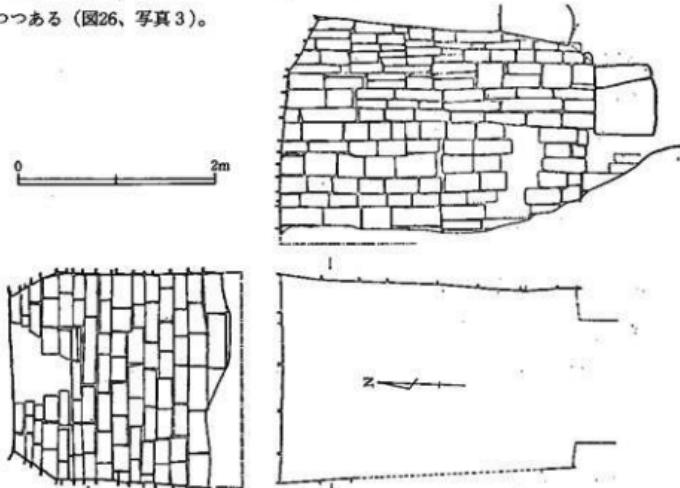


図26 南山古墳横穴式石室実測図（『宇陀福地の古墳』による）

5 まとめ

現状では、南北18m、東西16m、高さ1~4.3mの円墳であることが地形測量によって明らかとなった。墳形は、ややいびつな円形を呈し、南東方向からの視点を意識しているようである。

発掘調査を実施していないため詳細は明らかでないが、横穴式石室の床面は、標高410~410.5m付近に想定でき、墳丘の大半は盛土によっていると推定される。具体的な古墳の築造年代は明らかにできないが、磚積石室の形態、構造、用材等から7世紀中葉から後葉の築造と考えられよう。

6 抄 錄

遺 跡 名	南山古墳 <small>(榛原町遺跡地図番号 1-14、奈良県遺跡地図番号 12-D-6)</small>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字荻原 玉小西1868-1番地（小字：南山）
遺 跡 立 地	標高約410~414mの尾根稜線上
種 別	古墳
遺 跡 概 要	南北18m、東西16m、高さ1~4.3mの円墳 埋葬施設は横穴式石室（磚積石室）
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 柳澤一宏）
調 査 原 因	範囲確認調査（測量調査）
現地調査期間	1992年12月24日~1993年2月18日
測 量 面 積	約1500m ²
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 薄木祐蔵『古墳墓調書』 1892年

註2) 野瀬龍潜『大和國古墳墓取調書』 1893

秋山日出雄編『大和國古墳墓取調書』 (附)由良大和古代文化研究協会 1985

註3) 田村吉永「大和に於ける磚様式古墳」『大和志』3-4 人和国史会 1936

註4) 泉森 敏他『宇陀福地の古墳』 奈良県立橿原考古学研究所 1972

註5) 沢田啓一、菅谷文尉他『宇陀・丹切古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1975

図 版

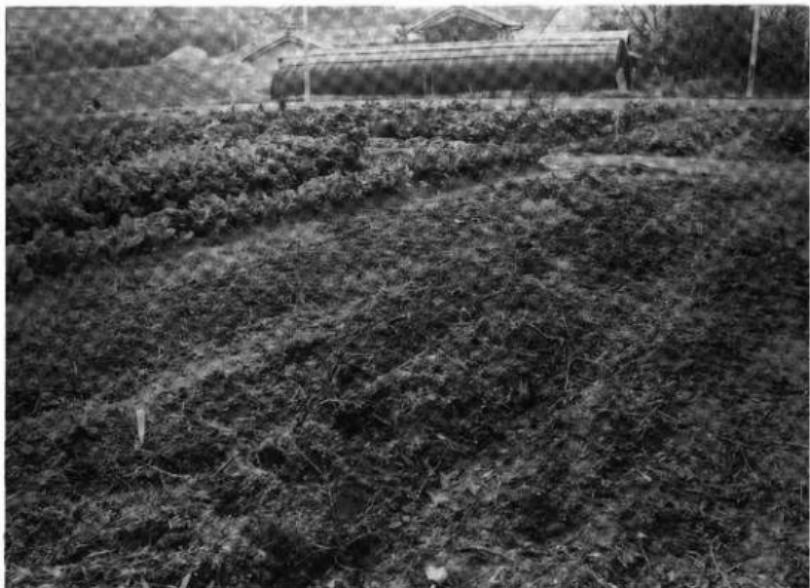


航空写真（南上空から）



航空写真（東上空から）

図版二 沢遺跡



調査前（北西から）



調査後（北西から）

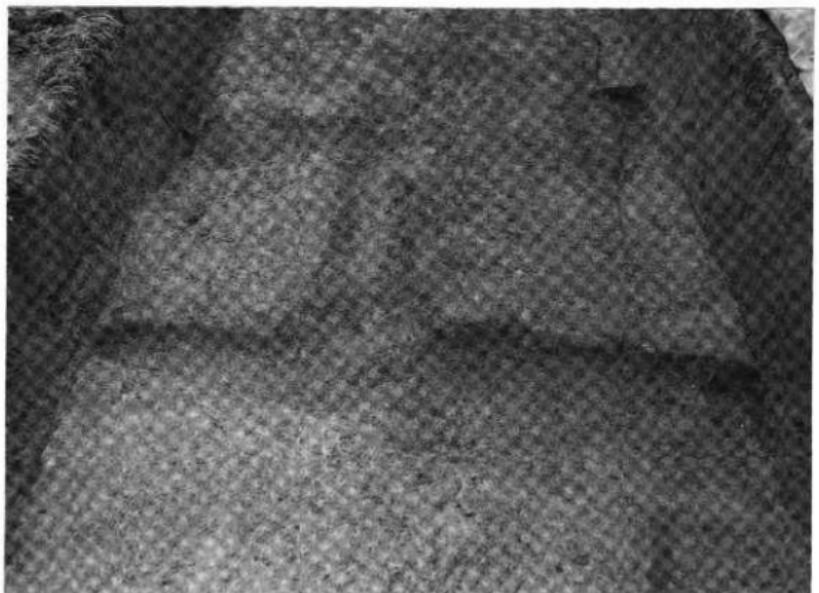


検出遺構（北から）

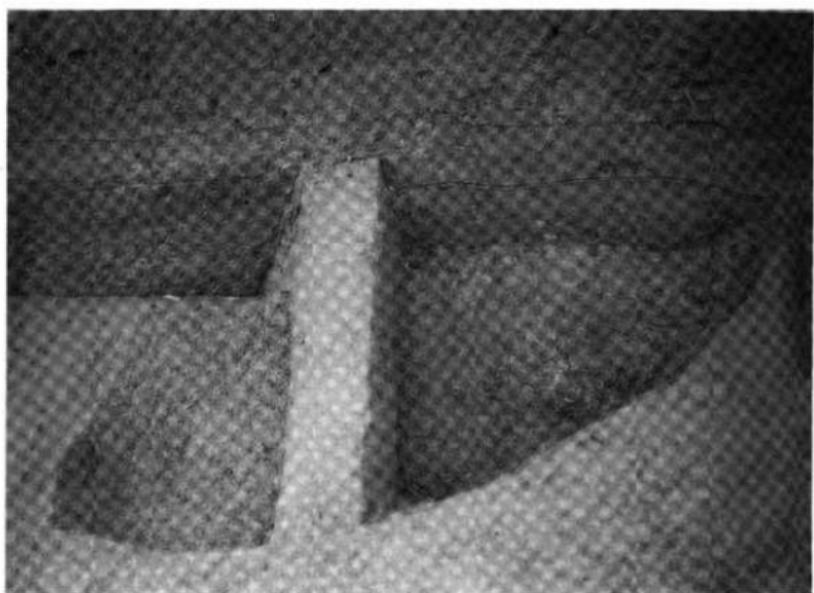
図版四 沢遺跡



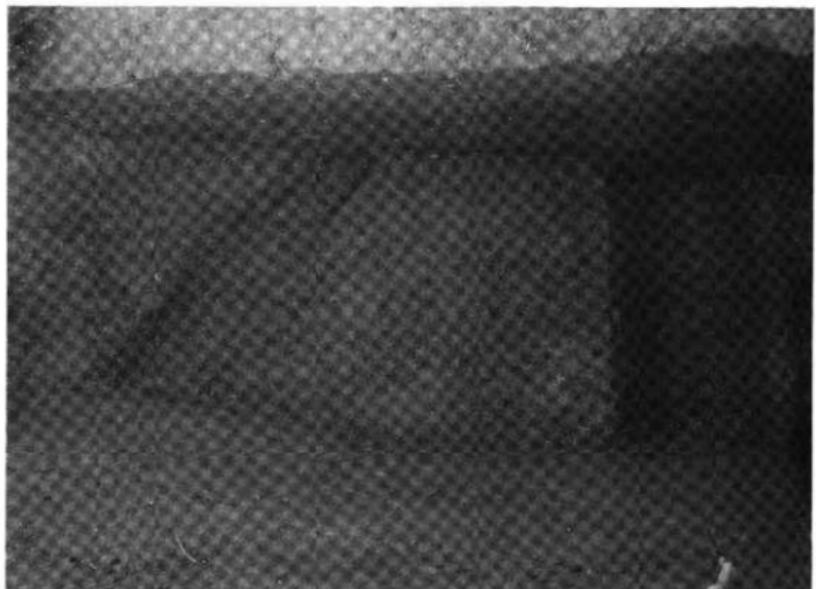
検出遺構（南から）



SD-02（北から）



SK-01 (東から)



SD-03・04 (東から)

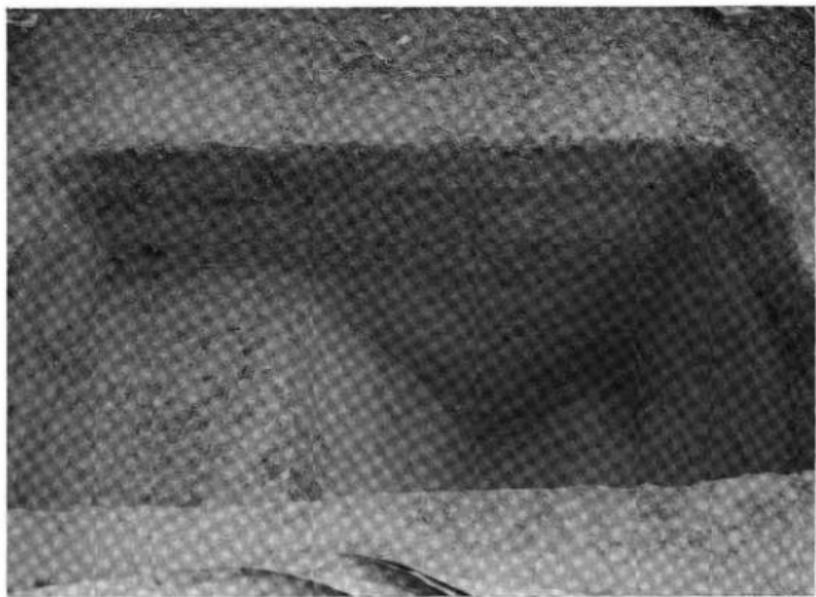
圖版六
高塚遺跡



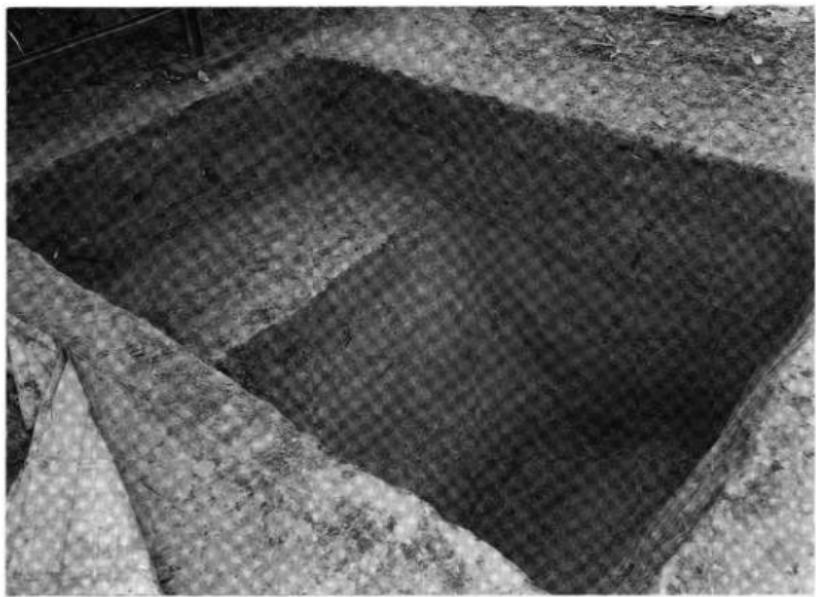
航空写真（南東上空から）



高塚（南東から）



検出遺構（北から）



検出遺構（北西から）

図版八
高塚遺跡

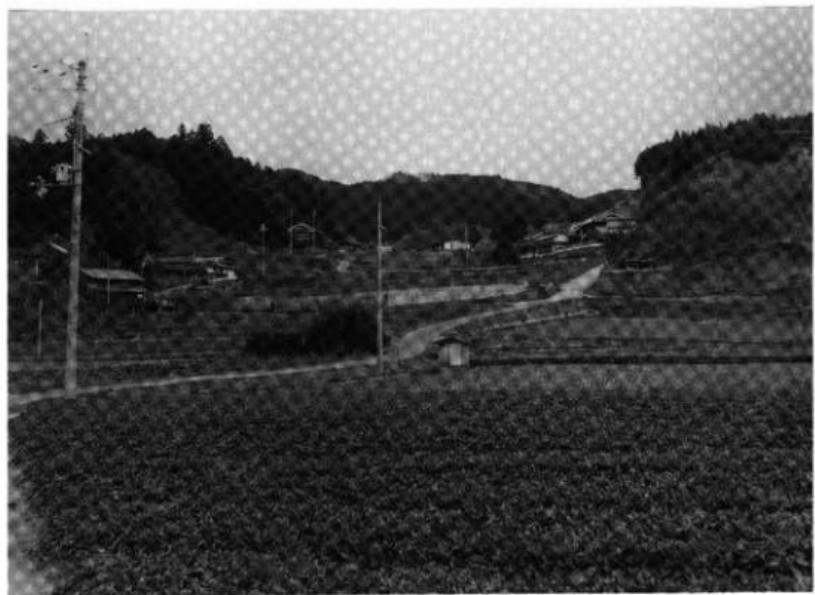


犬塚（北から）



犬塚石造物（南東から）

図版九 殿垣内遺跡



遠景（西から）



調査トレンチ（北西から）

圖版一〇 南山古墳



墳丘（南から）



墳丘（北から）

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1992年度

榛原町文化財調査概要 9

1993年 3月31日 発行

編集
発行

榛原町教育委員会
奈良県宇陀郡榛原町大字荻原164番地

印刷

共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号